

# 幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟  
会報 No.52

平成28年9月30日

## 能楽、それぞれの…

会長 馬場 洋一



今年はおリンピックイヤー。地球の裏側、南米リオデジャネイロは昼夜が逆なため、テレビ観戦で寝不足になった方も多いのではないだろうか。日本は若い選手が活躍し、ロンドン大会以上の成績を残した。2020年が楽しみだ。

オリンピックで感じるのが柔道の「国際化」である。日本の「お家芸」柔道が1964年の東京オリンピックで正式種目として採用され、急速に海外に広まった。国際競技に適応すべくルールも変更が加えられ、今や国際柔道連盟の加盟国は200を数えるという。国境を超え人種を超えて、永い時間をかけて

国際競技として定着してきたのだろう。

「国際化」と言えば、能楽界にも様々な挑戦がある。「シァター能楽」の芸術監督を務めるリチャード・エマート氏。アメリカ・オハイオ州生まれの氏は早稲田大学大学院を卒業後再来日し、外国人による能の上演や英語能の制作を長く続けている。昨秋、喜多流の中堅能楽師達と協力し、『能、ことばを超えて、世界へ向けて』と銘打った公演を喜多能楽堂で行った。主人と太郎冠者が日本語と英語で掛け合う「バイリンガル狂言」、日本語と英語が入り交じる「仕舞」や「能」、最後にはプレスリーの面をつけた創作英語能のさわりまでが披露された。プログラムディレクターの大島輝久氏は「能が難しいと考えられている要素の一つが言葉。ただ、安易に現代語に置き換えてはその良さを消してしま

う。いつそ英語に置き換えたらと考えた」エマート氏は「能の持つ美と力の劇的効果は英語でも十分伝わる」と、それぞれ書いている。「能」を解かりやすくし、海外に向けた可能性を探るという共通する気持ちで、新たな試みを成功に導いた。

一方、「楽しく、健康に」をモットーに謡曲の稽古を続ける方々も多くおられる。「つづき謡曲会」もその一つで、先日20周年記念謡曲会を拝見した。会員数30名は当連盟団体会員の中でも最大級で、会員の方々は楽しそうに謡い、舞われていた。祝賀会では「退職後の自分の居場所を見つけた」「シテを務めさせていただいたことが一番うれしかった」と口々に感想が述べられ、涙を浮かべる方もいらした。主催の長谷川武雄氏は「仲間づくりをしたくて始めたが、20年も続くとは思っていなかった」と感慨深げだった。会の運営には会員が前向きに取り組み、それぞれが役割を果たして親睦を図っている。長く続く秘訣はそのあたりにあるのだろう。「能楽を媒介にして生きがいを見つめる」…能楽を「趣味」とする私を含め、多くの方々の目指す形がそこにある。

英語能と素人謡曲会、一見全く方向が違ふようだが、どちらも能楽の存続にとって重要な課題を示唆しているように思う。

## 連盟報告（平成27年度）

企画事業担当 青山 圭佑

### 一、「五流能楽大会」及び「五流のつどい」について

「第31回横浜五流能楽大会」は平成27年10月3日（土）、横浜能楽堂にて開催されました。担当流派は宝生流（詳細は前51号を参照）。第32回大会は、平成28年10月1日（土）開催予定で、担当流派観世流により準備が進行中です。

「第19回五流交流のつどい」は平成28年3月12日（土）、横浜能楽堂にて開催されました。担当流派は観世流梅若会（詳細は今号を参照）。第20回大会は、平成29年3月11日（土）開催予定で、担当流派喜多流及び海謡会により申込み受付中です。

### 二、平成28年度総会について

平成28年度連盟定期総会は、4月25日（月）午後2時より横浜能楽堂2階にて開催されました。当日の出席者及び委任状の合計により総会は成立し、馬場会長を議長として総会議案各項説明が行われ、全議案が了承されました。主な議題は27年度事業活動報告・28年度事業計画・27年度会計報告と監査報告・28年度会計予算計画でした。また総会閉会時に理事の交代が報告されました。

### 三、役員改選について

今年度は任期2年ごとの役員改選期に当たするため、総会を一時中断し、理事の互選による会長選出が行われ、馬場会長が再任されました。また副会長は井實氏（観世流）が退任され、小林氏（宝生流）・青山氏（観世流）の2名となりましたが、当面は3名とせず事業運営していきます。総会が再開され新役員が承認されました。総会終了後第1回理事会が開かれ、全理事の担当配分が決定されました。

### 四、「第64回横浜能」について

平成28年6月4日（土）、能「八島」（宝生流・大坪喜美雄）狂言「空腕」（和泉流・石田幸雄）にて開催されました。チケットは完売、入場率は95%でした。

### 五、会員の動向について

平成28年4月1日現在の会員数は、個人会員414名（前年比4減）、団体会員43（前年比1増）、計457です。高齢化による会員の減少傾向は、当連盟に限らず能楽界全体の問題となつていきます。

そこで、新しいPRの企画として「横浜五流能楽大会」の写真入りのチラシを作ることが理事会で提案され、製作しました。また五流競演の「蟬丸」では、観世流が大鼓・小鼓の囃子入り仕舞を予定しています。会員の皆様も、話題になるような企画があればお寄せください。

## 第19回「五流交流のつどい」

観世流梅若会 桑原 弥兵衛

平成28年3月12日(土)、横浜能楽連盟主催「第19回五流交流のつどい」が横浜能楽堂において開催されました。開始は午前9時30分、終了は午後5時35分でした。総番組数は32番(素謡16・連吟3・独吟2・仕舞10・独鼓1)、出席者は延べ265名でした。めくりは新たに10枚作成しました。

また、今回は番組を400部多く作成し、総務倉藤理事の指導で市内各地域の地区センターや文化施設等に配布して、市民の皆様を知っていただき、観ていただくよう図りました。

なお、特別招待としては日本大学能楽研究会の学生に出演していただきました。元日本大学教授の内倉和雄氏(梅若会)にご紹介いただき、学生達と直接交渉することができました。演目は仕舞3番(菊慈童・敦盛・松風)。学生達は、「本舞台で舞うのはとても緊張しましたが、気持ち良く舞えました」と喜んでくれました。今後も学生達の出演には力を入れていきたいと思ひます。

大会の準備については、昨年10月から出演者の申し込み受け、番組作成及び校正2回、印刷と、順調に予定通り進行いたしました。

しました。各流派取りまとめ担当の方々のご協力のお陰と感謝しております。

最後に、今回は2回目となる連盟機関紙「幽玄」の号外を発行いたしました。内容は仕舞の「段」についてと、今回素謡で謡う6曲のあらすじを紹介しました。参考になれば幸いです。

## つづき謡曲会のあらまし

観世流 伊東 重章

当会は、横浜市港北地域(都筑区・青葉区)を拠点とする歴史ある謡会で、平成8年9月に設立し当年二十周年を迎える。会員は30名、男女の比率は二対一で男性が優位。モットーは「健康で仲良く謡曲を楽しむ」で、皆々謡曲人生を楽しんでおられる。同好会は楽しくなければ永続しない。当会にはそれだけの魅力がある。

設立者で指導者は長谷川武雄先生。先生は謡曲の普及に情熱を持っておられる。現職の弁護士として仕事をしながら月2回の稽古を20年間継続されたことは、並の人のできることではない。声量のある美声、緩急自在なめらかな謡で、見学者も一度聴けば魅了される。

お稽古は、中川西・仲町台両地区センターで毎月隔週の土曜日の午後2時間行われる。月千円の会費も魅力的。和気あいあ

いで楽しそう…、見学者はおしなべて印象をこのように語る。

先生は「謡曲は高齢になっても楽しめる。仲間をつくる場にもしたい」と常々おっしゃっている。事実、多士済々様々な人生を体験した方々が集まり、仲間となつて助け合いながら、謡曲の研鑽に努めている。年間五行事を消化しているが、その一つに毎年5月恒例の都筑民家園(センター北駅近くの古民家)で開催される『古典芸能に親しもう』がある。國學院大學観世会の学生が5、6名参加し、10年間も謡と仕舞を共演してきた。新緑の庭園には鯉のぼりが舞い、会員の家族、支援者、近隣のお客様などが100名程、休日の午後を一緒に楽しんでいる。

同好会を楽しむには、奉仕の精神とお互いの協力が必要。当会には「鶴と亀の会」という下部組織があり、教え上手な会員が講師となつて初心者学習の補助を行っている。また、パソコンの普及に伴い当会のホームページを作ろうという機運が生まれ、PCにたけた人々が研究検討して、昨年オープンにこぎつけた。

さて、当会は二十周年を迎え二つの事を企画した。一つは二十周年記念誌を編纂すること。もう一つは記念謡会を横浜能楽堂第二舞台で催し、祝賀会を行うこと。幸い両者とも順調に運



び、前者は今秋発行予定で、当会の五行事の記録と写真、会員の寄稿文等200頁を超える内容となる。後者は去る6月10日、好天に恵まれ謡会・祝賀会ともたくさんのお客様にご来場いただいて盛大に開催された。

## 二人の三河守

宝生流 寺部 良樹

私の出は愛知の豊川、昔の三河の国であるが、謡曲の登場人物に三河の国司を務めた人物が二人いたことを偶然知った。

一人は『俊成忠度』の藤原俊成である。歌人で「千載集」の撰者でもあり、藤原定家の父であることはよく知られているが、役人としても立派な人物であつたらしい。私の妻の実家は東海道五十三次の宿場の一つ御油で脇本陣をしていた旧家だ

が、今は亡き義母と話していた時、何故か俊成の話となり、「そう言えば家の先祖は、戦に破れて当時三河の国守だった俊成を頼り、志賀から三河へ逃げて来た」とのことであつた。

その俊成の像が最近蒲郡に建てられたというので、早速訪れた。子供の頃は風光明媚で格好の海水浴場だったのが今はすっかり様変わりしていたが、なるほど立派な俊成の像が竹島の方を向いて建っており、その説明に「4年間の国守在任中、当時クスの群生していた荒地の開発に取り組み、その成就を願つて琵琶湖竹生島から勧請したという竹島が、今は蒲郡のシンボルとなつている」とある。

もう一人は『石橋』の大江定基で、出家して寂昭法師と名乗り、唐に渡つた後皇帝より円通大師の号を賜つたという。

郷土の「むかしばなし」には、豊川の里の長者に「ふない」「いわい」「はない」という美しい三人の姫がおり、定基の妻になることを夢見ていたが、父が病気で世を去り、定基も都に帰つたことを知った姫達は、世をはかなんで尼となり、豊川の岸辺にそれぞれ草葺きの粗末な家を作つて静かに余生を送つた、とある。現存する花井寺は「はない姫」の家の跡に建てられたというが、数々の貴重な資料が残されている。



また、全国的には豊川稲荷ほど有名ではないが、近くに三明寺という古刹があり、定基が弁財天の尊像を祀ったとの記録がある。特に三重塔は有名で、本堂内宮殿と共に国指定重要文化財になっている。赤坂町や財賀町にも、定基の愛妾「力寿」の伝説が今も伝えられている。謡曲も結構身近な所に縁があるものである。

## 私を能楽堂に

### 連れていつて

喜多流 山岸 久子

松の絵だけが描かれた能舞台に、囃子、地謡、ワキ、シテと潮が満ちるように出演者が登場し、時を超えた物語を演じます。そして潮が引く如く元の何も無かった舞台に戻る、この潔さが好きで能楽堂に通っています。

私が能楽女子になったきっかけは、何気なく目にした横浜市の広報の「第九の合唱のように謡『高砂』を合唱しましょう」という募集記事でした。友人が神奈川フィルと第九を唄う会の合唱団に参加しており、毎年暮になると県民ホールへ聴きに行っていたので、今まで能楽には興味の無かった私が、ただ同じ第九という言葉に思わず応募していました。練習初日、西区の区民でありながら横浜能楽堂に

入ったのはこの日が初めてでした。客席はほぼ満員で、舞台には男の先生一人、喜多流の出雲先生でした。その時はマイクが故障していてマイク無しでの練習でしたが、とてもよく響くお声でたぶん客席の全員に届いたのではないのでしょうか。

私はこの時初めて「高砂」がこんなに長い曲ということを知りました。家で声を出して練習するとお経みたいだと言われ、歩きながらイヤホンで聞いていると、前を行く人が振り返って変なおばさん……という顔をして足早に離れて行きます。アツいけない、声を出していたんだと恥ずかしさで恐縮します。さて本番、これまで練習してきたパートが一曲に組み込まれ、お囃子と地謡の先生方と私達の謡に合わせて先生が舞を舞われ、全員が一つになった時は納得の瞬間でした。気持ちが盛り上がったまま、帰りにはお稽古希望者の用紙に名前を記入してしまいました。そして15年以上が経過しました。

実は、こんなに夢中になった能ですが、舞台を観ている途中にとってもとても気持ちの良い睡魔に襲われます。友人にその話をすると、打楽器の音は母の胎内にいた時に聞いた心臓の鼓動と同じなのだそうです。だとすると能の曲は母の胎内を流れる血液の流れなのだろうと、勝手に

に解釈して納得しています。何もわからないまま勢いで始めたお稽古ですが、また高砂をきっかけに若い能楽女子が増えるといいなと思っています。

## 観能で経験したこと

観世流梅若会 三浦 玉三郎

この度「幽玄」という広報誌に何か書いてくれと頼まれ、日頃から原稿依頼の大変さを聞かされていましたので、断りきれずに引き受けてしまいました。謡を稽古しているのだから何かは書けるだろうと思われたのでしょうか、今まで文章など書いた覚えもなく、漢字も忘れてしまっているもので、引き受けてからが大変でした。新聞を読みながら気の付いた言葉をピックアップしてメモしたり、辞書を引きながら書き取りの練習をしました。これを機会に、このように勉強を飽きるまで習慣にしようと思っています。

さて、前置きが長くなりましたが、先日、能を観に行きました。能の観客は圧倒的に女性が多く、男性が一人では行き辛いので敬遠気味だったのですが、付き合ひもあり、暇ということもあったので、東中野（梅若能楽堂）まで出かけてみました。そうしたら珍しいことが起こりました。一つ目は最後まで居眠りをしなかったこと、二つ

目は公演中に地震が起きたことです。これまでに経験のないことで、翌日の新聞によると震度4だったようです。三つ目は、早拍子の最中に小鼓が無くなったことです。で、どうするんだろうと見ていたら、扇を持って手拍子です。その間2、3分でしたが、無事に最後までやり通しました。

眠くならなかったのは、謡の稽古でやっていたので内容が理解できたせいかもしれません。能の演目は、観客がある程度物語を知っていると思って作っているのではないかと感じます。和歌を基にしたものや、源氏物語・平家物語などがそうだと思います。

## 金剛流久良岐会

金剛流 高木 緑

当会の始まりは平成5年に遡ります。横浜市が主催し久良岐能舞台で開講された五流謡曲教室に毎年応募があり、金剛流でも熊谷伸一・真知子先生のご指導のもと、だんだんと仲間も増えてきました。

平成11年には、京急日ノ出町駅から徒歩2分の所に熊谷先生ご夫妻が稽古舞台を構えられ、そこでの稽古が始まって今日に至っております。その他、逗子・成城・中山で稽古している仲間を含めて、現在は7歳から

85歳まで数十名が、個人またはグループでお稽古に励んでおります。

年間の恒例行事は、新年「謡い初め」、3月「発表会」、暮れの「堪能至夢会（たのしみかい）」ですが、堪能至夢会では、装束づけをして頂いて舞囃子や仕舞を舞うなどの特別趣向で楽しんでいます。さらに、夏の「横浜金剛会」、能楽連盟の「五流能楽大会」「五流交流のつどい」、磯子文化協会の「つどい」（春・秋の2回）と、発表の場は多く、発表会が近くなると、稽古場は空き時間が無いほど会員が入れ代わり立ち代わりして、稽古に汗を流しています。



25周年となる2年後は、奇しくも岡先生の「賀の年」と重なるので、皆の心に残る発表会にしようと、計画を練っている所です。（熊谷真知子先生・1期生荒山さんの対談より要約）

## 金春五星会と

## 興福寺薪御能

金春流 入沢 頼二

平成28年度の「金春五星会」は、奈良興福寺で千年以上の歴史を持つ「薪御能」の時期に合わせて奈良で開催され、金春一門を上げて多数の参加となりました。ちなみに現在全国各地で行われている薪能はこの「薪御能」にならったことです。

「薪御能」2日間のうち、金春一門は5月21日(土)に興福寺南大門跡で行われた金春流80世宗家金春安明先生の「杜若」、金剛流26世宗家金剛永謹先生の「藤戸」の舞台を鑑賞しました。

## 能楽堂だより

28年11月以降の横浜能楽堂の公演予定は、次の通りです。このほか毎月第2日曜日に普及公演「横浜狂言堂」を開催いたします。

開館20周年記念 企画公演「横浜の能」

11月26日(土) 午後2時開演

能「放下僧」(喜多流) 佐々木多門

狂言「猿轡」(和泉流) 野村萬斎

能「六浦」(観世流) 野村四郎

S席八千円/A席七千円/B席六千円

チケット発売中

※11月26日(土) から1月9日(祝・月)まで、

「能面コンクール2016」入賞作品の特別展を併せて開催します。

「能の五番 朝薫の五番」

満月の月明り、炎が作り出す濃淡と揺れ動く灯り、風に吹かれて煙はたなびき、時折炎が激しく上がりパチパチと弾ける音、神秘的、幻想的な空気は神事から始まったことを実感しました。金春のルーツ、能楽の歴史を体感できる貴重な機会となりました。午後5時30分からスタートし終演の9時過ぎまで「薪御能」は心と体に沁みる体験でした。

終演後、我が綱雄会(山井綱雄先生社中)はホテル近くの居酒屋で25名程が参加して懇親会を開き、薪御能の余韻もあって大いに盛り上がりました。

翌日22日(日)、金春円満井会法人化30周年記念「第21回金

春五星会」が、奈良春日野国際フォーラムで、午前10時より午後3時まで行われました。我が社中からは仕舞「野守」、独吟「班女」、24名による連吟「東北」を演じました。会場は、奈良の歴史文化と自然が見事に調和した奈良公園や世界遺産登録の東大寺大仏殿、春日大社に隣接し、能舞台は他に例を見ないほど見事で、そういう環境での金春五星会はまだ格別に心に残るものでした。

金春五星会終了後、午後4時より会場を奈良市内の「なら和み館」に移し、金春円満井会法人化30周年及び80世金春安明宗家継承10周年祝賀パーティーが開催され、盛大で楽しい祝宴の

## 28年10月～29年3月の公演案内

平成29年2月4日(土) 午後2時開演

「復曲」能「生贄」(観世流) 梅若玄祥

組踊「孝行の巻」 宮城能鳳

S席七千円/A席六千円/B席五千円

チケット発売日 11月12日(土) 正午から

(初日は電話・Webのみ)

普及公演「バリアフリー能」

平成29年3月18日(土) 午後2時開演

狂言「伯母ケ酒」(和泉流) 野村万蔵

能「小鍛冶」(観世流) 観世喜正

S席四千元/A席三千五百円/B席三千元

※介助者1名まで無料

チケット発売日 12月17日(土) 正午から

(初日は電話・Webのみ)

ひとときを過ごしました。

初日の薪御能会場に行く道すがら、我が綱雄会社中一同は金春宗家のお墓のある奈良市内の念仏寺を訪れてお墓参りをし、また、伊勢神宮や出雲大社より歴史が古いと言われている桜井市の三輪明神も訪ね、奈良の歴史の深さ、金春流の歴史の深さを味わった2日間でした。

## 藤田先生に出会えて

下懸宝生流 松藤 久美

奈良薪御能に魅せられて五月晴れの中、春日大社、興福寺と行ってきました。御能が目的の旅とは、十年前には無かったことでした。

自治会館で先生の声に引き込まれ、その場で教えを乞いながらも、全く未知の世界。謡えますか?と尋ねると「おしゃべり好きでしょ、謡えます」と心強い一言。どんなふうに声を出せば良いですか?「コラッ!」って大きな声を出すと、お腹にぐつと力が入るでしょ。それを下へ下へと押していく感じで、低い声を出す。…と教えていたのだいも、低い声を続けるのは苦しいもので、今でもセキ込みます。おさらいをする中で「では、皆さんでどうぞ」と言われると最悪、「では一緒に」は最高の幸せ。先生の声の響きの中に自分の声も交じる心地良さはたと

えようがありません。

やがて4年がたち、謡本も10冊を超えた頃、「五流のつどい」に連吟「羽衣」で初参加。舞台では先生の声をつかめず、主人から「お謡にも変調ってあるんだ」と一言。めげました。翌年には「玉鬘」のシテ役をいただき、これは練習しかないと思って、100回謡うことを自分に課し、「正」の字を書きながら練習。何時も書き写したメモとレコーダーを持ち歩き、少しでも謡の声が出るようにと、ハア!ホッ!と強い息を吐く練習もしました。そして、練習日の度に「声が変わってきたね」と先生に褒められたのが励みになりました。

今ではお仲間も増え、横浜能楽堂、久良岐能舞台、港南台地区センター等で発表の機会をいただいて楽しみも増えました。藤田先生の力強い謡と情熱をしっかりと受け止められるよう、皆さんと一緒に歩んで行きたいと思っています。そして、またいつか、能との出会いの旅に出かけたいと思います。

## 横浜能楽連盟連絡先

◎事務局 倉藤

TEL〇四五―八三五―二三六一

◎横浜能楽堂

TEL〇四五―二六三―三〇五〇